

## 倶知安風土館講座 オビラメ学（第3回）

2012年2月18日

尻別川の未来を考えるオビラメの会

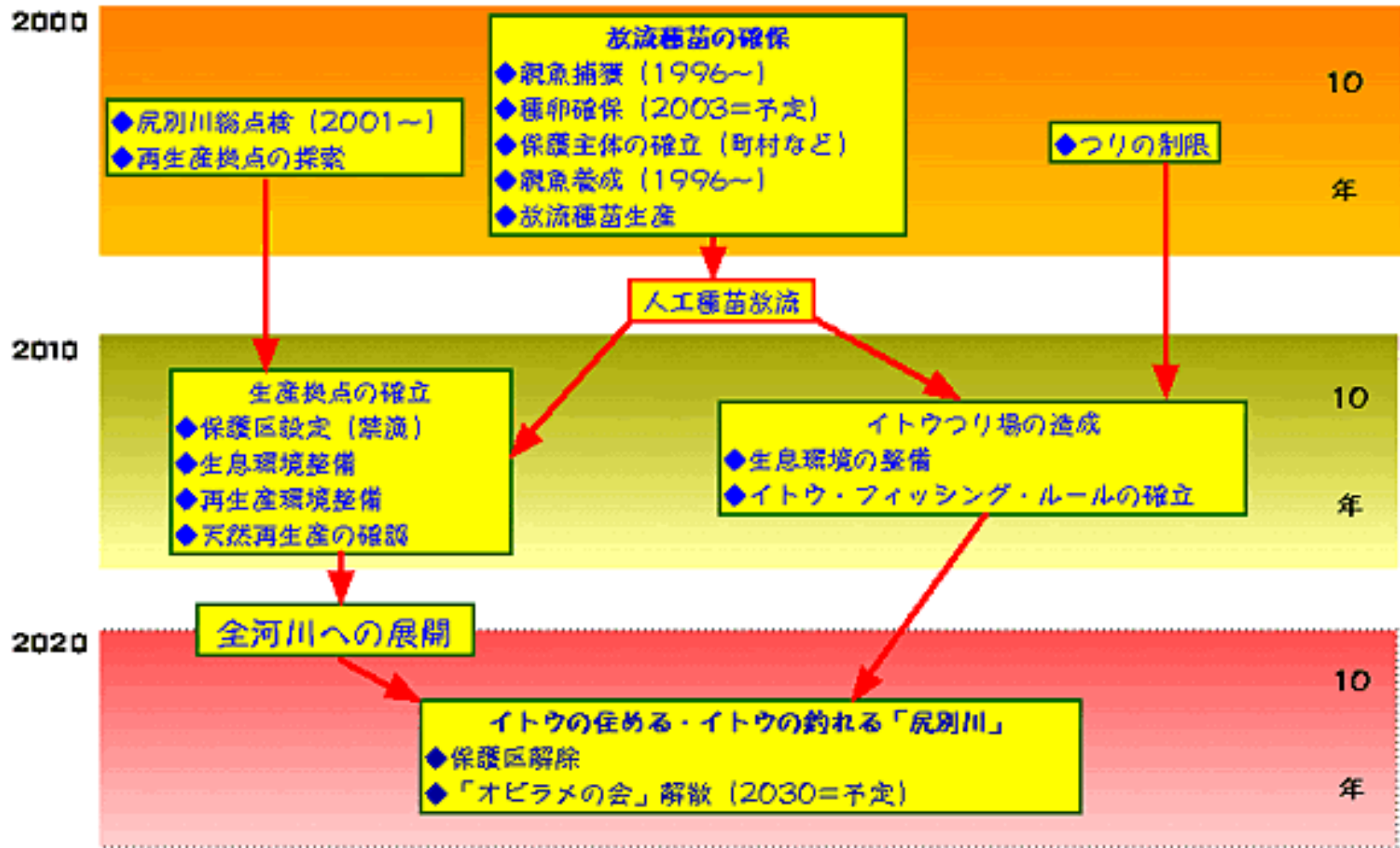
<http://obirame.fan.coccan.jp/>

## + Part 1 これまでの活動

- 1996年4月 オビラメの会設立
- 1998年9月 京極町内で5個体の生け捕りに成功。  
「デカ」「チビ」などと名付け、  
倶知安町内で畜養開始。
- 2000年12月 第1回オビラメ勉強会「尻別イトウはいま」  
講師・川村洋司さん  
  
「自然再生産の痕跡ほとんどなし」  
「尻別川のイトウ個体群は絶滅寸前」
- 2001年 **オビラメ復活30年計画策定**



# 「オビラメ復活30年計画」



## + 「再導入」手法の採用

- 「再導入re-introduction」  
ある種がもともと生息していた地域であったが、すでにそれが絶滅してしまった場所に、その種を定着させるよう試みること
- 「補強（強化）re-inforcement/supplementation」  
現存個体群に同種の個体を加えること

国際自然保護連合

「再導入のためのIUCN/SSC ガイドライン」（1995）

# + 放流は「最後の手段」

- 生息に適さない環境に放流した場合には、放流個体が短期間のうちに死滅するだけに終わる。
- 在来集団・他種・群集に生態学的負荷（捕食、競合、病気・寄生虫の伝染など）を与える。ひいては生態系に不可逆的な負荷を与えうる。
- 在来の近縁種と交雑する。その結果、遺伝・形態・生態的に変化し、地域環境への対象種の適応度が下がる。交雑個体に稔性がない場合には、直接的に在来・放流両集団の縮小につながる。
- 在来の同種集団が、遺伝的多様性が小さい、あるいは在来集団と異なる遺伝的性質をもつ放流個体と混合したり、置き換わることにより、地域環境への適応度が下がる。

日本魚類学会「生物多様性の復元を目指した魚類の放流についてのガイドライン」（2005年）

# + オビラメの会「イトウ再導入」実績

- 2001年 再生産拠点の探索「プロジェクト2001」

最初の再導入実験河川として倶登山川  
(倶知安町) を選定 (Bランク)

- 2003年 尻別川産イトウの人工孵化に初成功

- 2004年 プレモニタリング (物理環境、生物環境)

人工孵化稚魚を初放流 (2004、05、07、10年)

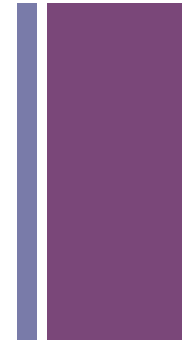
放流魚モニタリング

# + 尻別イトウの絶滅要因は？

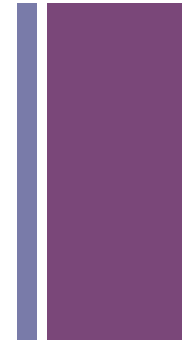
## ■ 自然繁殖（再生産）の中断

→ 群れの少子高齢化

→ 構成員の急減



# + なぜ自然繁殖できない？



## ■流域の分断

← 繁殖環境と生息環境がダムで閉ざされている

→ 通行不能なダムの解消・改良



## + 生息地復元のために

- 2005年 後志支庁長、倶知安町長に  
倶登山川落差工改修要望
- 2006年 尻別川圏域河川整備計画  
検討委員会に参加
- 2008年 倶登山川落差工  
改修工事開始（全5基）
- 2010年 **約20年ぶりに尻別イトウ自然繁殖確認**